

交流集会「長崎原爆投下時における
看護師宮崎トミホ氏の救護活動を振り返り、
その偉大な功績を偲ぶ」

Review the meeting, nurse's Tomiho Miyazaki review
of the relief activities after the Nagasaki atomic bombing:
And we remember that great achievement

松成 裕子¹ 今村 圭子¹ 新川 哲子²
浦田 秀子² 金丸 由美子³

Yuko MATSUNARI¹ Keiko IMAMURA¹ Tetsuko SHINKAWA²
Hideko URATA² Yumiko KANEMARU³

1 鹿児島大学医学部保健学科

2 長崎大学大学院医歯学総合研究科

3 長崎大学病院

1 Kagoshima University Faculty of Medicine School of Health Sciences

2 Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

3 Nagasaki University Hospital

日本放射線看護学会学術集会は、長崎では2回目の開催となった。開催1回目の第2回学術集会プロローグで、宮崎トミホ氏は、原爆投下時に自らも被爆し、負傷を負いながらも長崎医科大学附属病院（現大学病院）で看護活動を行っていたことを講演された。その時、「まだまだ、話したいのです」と語りつくせなかったことへの熱い思いを最後の結びとされた。そのことが今でも思い起こされ、今回の「偉大な功績を偲ぶ」会となった。

生前、学生さんの為ならと長崎大学へ足を運んでくださり、私達後進にその看護活動を直接伝えてくださった。その時の語りを論文¹⁾とし、インタビュー映像はDVDとして記録した（科学研究費助成事業研究成果報告書：長崎原爆投下時における看護職者の災害復興活動に関する研究）。当日は、その映像を流しながら記録をもとに、その活動を報告した。

「原爆投下前の戦時中の生活と業務上の苦勞問題点」では、戦時中は、非常事態に備えて、医療物資を分散格納し、限られた中で業務にあたっていたこと、空襲警報が度重なり、状態の悪い大勢の患者の避難が困難となり、管理者としての対応策、地下室を病室として使うことになり、患者や看護師は負傷を免れていたことが語られていた。

「原爆投下当日の状況と行動」では、原爆によって一瞬の内に壊滅、炎上し、教職員・学生・入院患者と付添い人の命が奪われたこと、原爆の爆風の威力は、激しく、それによる粉塵を被り、吸引したことから、宮崎氏

は放射線被ばく時に適切な処置を指示し、患者や看護師は結果的に除染するという結果を導いたことであった。

「被爆直後の看護活動」では、避難のプロセスとして、トリアージの難しさが語られた。

また、「10月8日までの看護活動」は、救護所では、疎開していたわずかな治療材料による活動しかできなかったが、当時の三つの看護の基本（食べる、身体の清潔、睡眠・休息を補う）を守ってケアしていたこと、医療スタッフの不足の中で近県や救護所近くの地域支援を受けたことから、救護活動には地域の連携支援が必要であるということであった。

「10月8日以降の看護活動」では、いかなる環境の中にあってもスタッフの業務環境を考慮したリーダーとしての判断がなされ、対応したことであった。

最後に参加して下さった方々からの感想、意見交換によって幕を閉じた。

このように宮崎氏の功績は、放射線事故の被災者に対する看護としても、大規模災害時の看護活動としても、今後の学問的構築に繋がると考える。また、語りを受けたわれわれは、そのことをさらに後身に伝承し、学術的根拠を示していかなければならない責務がある。

引用文献

- 1) 松成裕子, 金丸由美子, 浦田秀子, 他. 長崎原爆投下時における看護師の看護活動についての聞き取り調査. 日本災害看護学会誌. 2014, 16(2), 46-55.